

【論文】

## 1881年ポグロムに関する資料の分析（2）

黒川 知文

### 第162号

キエフ県憲兵局長、1881年5月21日、第943号。キエフ。秘密事項。国家警察局長宛。本年5月4、5、10日付の私の電報の補足として、私の補佐であり、私がスメラ村に特別派遣したルドフ大佐の報告の写しを添付する。これらの報告の日付は、本年4月30日、5月9、11、14、15日であり、番号は72、82、84、86、88、89、90号である。テーマは「キエフ県チェルカッスキー郡スメラ村において、ユダヤ人の殴打、住居の破壊、資産の略奪という形で発生した騒乱について」である。ノヴィツキー大佐。(L. d. 34)。

### 第163号

キエフ県憲兵局長補佐ルドフ大佐の報告（1881年4月30日付、第72号、局長宛）の写し。

本日ベルディチェフ市ユルドフカの扉に、「人民委員会は、指示された時間に、ユダヤ人と開始するために、ある場所に集まって準備するよう求める。では」という内容の文章が書かれたメモが3枚貼り付けられていた。エリサヴェトグラード市やキエフ市での最近の事件は、ベルディチェフ市の住民、主にユダヤ人に、パニック状態に陥らせるほどの恐怖を与えた。毎晩、棍棒

やバールで武装した大人や子供からなるユダヤ人の群衆が数千人集まっている。この群衆は、通りから通りに歩き回っていた。彼らにとって、どんな小さな出来事でも、もっとも怖ろしい暴動を起こすには十分であった。毎日、ユダヤ人は襲撃を待ち望み、最も愚かな噂話が広まっていた。キエフから犯行計画者たちの一団がやってくるだろうとか、彼らは周辺の村々からやってくるのだ、とか。すべての持ち物は倉庫に保管し、夜ごとに大箱を方々に移動し、キリスト教徒である官吏のもとに隠したりしていた。金持ちは、すべてを捨てて、家族とともに外国に逃げていった。商売は停止した。怖ろしいパニックを住民の間に起こすには、最も小さな何らかの取るに足りない原因があれば十分であった。女性や子供の群衆は、役人の住居に逃げ込み、恐怖の絶叫と悲鳴を上げながら保護を求めている。追伸：本日レイリスクイー連隊の1個大隊が到着の予定である。ルドフ大佐の署名。(L. d. 35)。

#### 第 164 号

キエフ県憲兵局長補佐ルドフ大佐による局長への報告（1881年5月8日付第82号）の写し。

閣下の電報を受け取り、私は5月5日にスメラ村にやってきた。スメラ村でのポグロムに関して集められた報告から、次の点が明らかになった。5月3日、礼拝式の後で、食肉業者ユダヤ人ヴェルピツキーは、スメラ村の定期市で去勢牛を買った際に、農民たちと喧嘩を始め、殴り合いに発展した。現在、彼らの側にユダヤ人と農民の群衆が集まり、殴り合いに参加している。農民たちが「俺たちを殴ったな」と叫ぶ声を聞いて、工場から労働者たちが絶え間なく大挙して集まり始めた。全部で1個半中隊120人と言われる軍隊が集まった。指揮官は連隊長ゴルボヴィー大佐であった。地元の郷警察署長ドブロヴォリスクイーが彼の指揮の下にいた。解散の説得にもかかわらず、群衆がやってきては乱暴狼藉を働いた。ある複数の場所において、ユダヤ人と

壮絶な殴り合いを演じた。ここにも多数の群衆が集まった。彼らは、棍棒や斧で武装していた。群衆がこちらの説得を聞かず、解散しないで乱暴を働き続ける様子を見るや、軍指揮官は、発砲することを通告した。この威嚇に対して群衆は注意を払わなかった。次に、連隊長は、空に向けて空砲を鳴らした。このようにしても、群衆は笑い飛ばし、「こけ脅かしだよ」と言った。そして、4丁の銃に実弾を込め、群衆に向かって発砲するように命令が下された。これらの発砲によって、2人が死亡し、1人の婦人が足に軽傷を負った。群衆は怒り狂い、いたる所でユダヤ人の家の窓を割り始めた。その時、連隊長はかなり遅くなっていたことに気づき、また、下級警官がまだ昼食を取っていないことに気づいて、兵隊に宿舎に戻るよう命じた。群衆はそのような命令を待ち受けており、軍隊が去るやいなや、怒り狂ってユダヤ人の家に向かって突進し、それを破壊し、ユダヤ人を殴った。ユダヤ人は力の限り自己防衛しようとした。暴徒は夕方まで、何にも妨げられずに破壊を繰り返した。破壊されたのはほとんどユダヤ人の家だけであった。夜になると破壊は止んだ。5月4日朝に再び労働者の集団が突然現れ、まだ手がついていない商店を襲い、略奪と破壊を始めた。群衆は、誰にも妨害されずに、すべてを破壊し、村からやってきた住民は略奪を働いた。連隊長は、広場にユダヤ人の群衆を集め、彼らの回りに軍隊を配置した。この日、軍隊は、騒乱を止めるために積極的な活動を何もしなかった。午後5時頃になって、ベンジェルスキー連隊の3個中隊とコサック騎兵中隊が到着してからやっと、群衆を追い散らし、300名ほどを逮捕した。取り調べもなく、たまたま道を歩いていた人をすべて逮捕した。広場で逮捕された人々の群は軍隊に取り囲まれていた。そこに連隊長が将校と警察署長を連れてやってきて、命令を発し、体罰刑が始まった。婦人も、老人も、若者も、子供も含む全員に鞭が振り下ろされた。鞭打ちが終わると解放された。鞭打ちは、スメラにすでに県知事が来ていた翌日まで続いた。鞭打ちを受けた中に、弾に当たって傷を受けている人がいることが分かった。略奪の際に群衆の中に指導者がいることに多くの人が気づいていた。口笛や鐘を聞いたり、次のような目印を見た人がい

た。帽子がかかっているステッキとステッキに結びついた赤い帯。指導者は、騒動の最中に暴徒を止め、他の破壊の場所に移るように命じ、農民の財産に手をかけないように指示した。この点で彼らは他の人々と区別された。多くの人々の証言によれば、小麦粉売場は、唯一ステパシュコ下士官の庇護と嘆願によってのみ、破壊から守られた。私は、デミドフ下士官を補佐役としてスメラに呼び寄せた。現在、私は、一体誰がスメラでの騒乱の指導者であるのか、これらの騒乱は犯罪計画者たちの教唆の結果であるのか、を探るために情報を非合法的手段で集めている。スメラ村の住民に関する秘密情報の収集に関して県知事のいくつかの依頼は実行されている。ルドフ大佐の署名。(Ll. d. 36-37)

#### 第 165 号

ベルジチェフスキー郡におけるキエフ県憲兵局長補佐ルドフ大佐の報告 (1881 年 5 月 11 日第 84 号) の写し。局長宛。

報告第 82 号への追記として、スメラ村とその周辺において 5 月 3、4 日に発生した騒乱に関して閣下に詳細な報告をする。キエフ市での騒乱の後、スメラ村及びその周辺の農民たちの間で、「ユダヤ人を打ち、追い出す時が来た」という噂が広まっていた。この噂は、地元当局の働きかけもむなしく、どんどん成長し、ますます強固になっていった。ユダヤ人住民はパニックに陥っていた。ベルジェルスキー連隊の 1 個大隊がスメラ村に到着すると、住民は落ちついたかに見えた。5 月 3 日にスメラ村において、2 週間にわたる市が開かれた。多くの周辺に住む農民たちが集まってきた。正午頃に、食肉業者ユダヤ人イツコ・ヴェルビツキーが、ある農民と子牛付畜牛を取引し始め、42 ルーブルで彼から買った。彼が代金を取り出した時に、ある見知らぬ人物が現れて、売り主である農民に 45 ルーブルで買うと言った。このことが原因で、ヴェルビツキーと見知らぬ客との間に口論が始まり、殴り

合いになった。まず最初に殴ったのは、ヴェルビツキーであると言われている。殴り合いが始まったと聞いて、ユダヤ人や農民たちが集まってきて、喧嘩に加わった。群衆はふくれあがった。ヴァリコフキー巡査と村長（むらおさ）が逮捕したのは、ヴェルビツキーだけであり、売り手と見知らぬ客は身を隠した。これが騒乱のきっかけであると思われる。群衆は、ユダヤ人の集団だけではなく、農民たちの集団も大きくなった。ユダヤ人が殺されたという人もいれば、農民が殺されたという人もいた。群衆がいる場所に、連隊長と警察署長に率いられた軍隊がやってきて、群衆に向かって解散するように命じた。しかし、群衆はますます大きくなっていった。その命令にも耳を貸さず、彼らは「ユダヤ人に復讐せよ」と叫んだ。この群衆から分かれた人々が、様々な通りに散っていき、いたる所でユダヤ人の家屋の窓ガラスを叩き落とし始めた。軍隊は、密集隊形を取りながら、通りを進み、群衆を追いやったが、群衆は、一つの場所から逃げると、別の場所に集まった。叫び声と喧噪は堪えがたい程であった。説得が効を奏さず、群衆がますます騒ぎ立てる様子を見て、連隊長は、発砲すると告げた。しかし、その威嚇にも群衆は関心を示さなかった。連隊長は銃に空砲を詰めて、空に向かって2回の一斉射撃をするように命じた。これに対して、暴徒たちは、大声で笑い、騒ぎ立ち、あざ笑い、次のように叫んで言った。「撃てっこないさ」と。その時、連隊長は（恐らく）8丁の銃に実弾を詰めるように命じて、4つの実弾を群衆に向けて撃ち、4つは空に向けて撃つように命じた。発砲により、2人の男性が死亡し、1人の女性が負傷した。この後で、群衆は怒り狂い、悪口雑言を言い、「ユダヤ人のせいで、農民の血が流された」と叫んだ。この際、ユダヤ人が主な住民である郊外の集落コヴァレフカでは、ユダヤ人とキリスト教徒の間に激しい殴り合いが始まっていた。この噂はさらに群衆を興奮させた。彼らはすでに破壊活動だけではとどまらず、ユダヤ人の家に入ってすべてのものを通りに引き出した。暴徒は家から投げ出されたものをたたき壊した。連隊長は、かなり時間が遅くなったので、昼食を取らせるために部隊を兵舎に帰した。すでに誰も止めることができない状態になってい

た群衆は、猛り狂ってユダヤ人の家を破壊するために殺到した。群衆は、セレブリャンスカヤとヴラジミルスカヤという2つの通りが交差する地点に集合し、煙草とゼルター炭酸水を売る小さな店を取り囲んだ。店はすでに鍵が掛けられていた。彼らは、「この店から数発の銃弾が飛んできた。ここにユダヤ人が隠れているに違いない」と言った。地元の警察署長が、予審判事スパロと共に、商店を開けるよう命じて、群衆に、中に誰もいないことを見せた。ヴラジミルスカヤ通りを横切る鉄道線路の踏切の近くにモシユカ・ブロツキーの家があった。群衆はそこに集まった。軍隊がこちらに近づき、群衆に向かって解散するように説得を始めた。モシユカ・ブロツキーの家には、ファストフスカヤ鉄道局書記ギエフスキーが住んでいた。彼は、破壊を恐れて、ボブリンスカヤ駅に、2つの車両を発送する予定であると知らせておいた。これらが来たので、ギエフスキーはブロツキーの部屋から出た。軍隊が別の場所に立ち去った後、群衆はブロツキーの家に集まり、破壊した。深夜になってやっと群衆は各通り（ヴォロヴァヤ、ポリツェイスカヤ、セレブリャナヤ、モストヴァヤ、キエフスカヤ、ムチュナヤ、ヴラジミルスカヤ、リヴォフスカヤ、ナベレジュナヤ、バザルナヤ）に散って行った。郊外にあるコヴァレフカ、ジトミルスカヤ、フルマンスカヤ集落や、ユダヤ人街、ユダヤ人横町及び手工業横町において、ユダヤ人の家屋が破壊された。窓やドア、錠戸が外された。いくつかの家では、壁が外され、暖炉や煙突が壊され、床が取り外され、家にあるすべての家財が通りに投げ出され、打ち壊され、滅茶苦茶にされ、破壊された。枕や羽布団からは羽根や綿が引き出された。しかし、略奪されることはなかった。翌日、朝から再び、郊外の工場やファストフスカヤ鉄道の修理工場から、夥しい数の群衆が集まってきた。郊外に住む農民も妻を伴って馬車に乗ってやってきた。この群衆は、ユダヤ人の商店を破壊するために殺到した。修理工場で働く労働者は、ハンマーや鉄のバールを持参していた。これで商店の錠前や鉄製錠戸やドアを壊すためであった。彼らは、商店にある商品を通りに投げ出した。農民は妻と一緒にあって、商店に殺到し、群衆が中から持ち出したものをすべて自分の

荷馬車に積み込んだ。暴徒は、商店にあった砂糖を頭に載せて運び出し、その場で破壊した。様々な個口商品は、泥の中や石油入り樽の中に投げ捨てられたり、バラバラにされたりした。既製服を売る衣服店では、すべてがずたずたに引き裂かれ、通りにまき散らされた。既製服と長靴をその場で着て去った者もいた。本日、軍隊は、群衆の通り道を塞ぎ、自分の財産を守るために突進しようとするユダヤ人を引き留めるために、いくつかの通りに配置された。広場の一つにおいて、ユダヤ人の群衆約3000人が集められ、軍隊に包囲された。

5月4日の午後2時に、ベンジェルスキー連隊及びコサック兵の5個中隊が列車で到着した。略奪を働く群衆に向かって誰かが「軍隊が来たぞ」と叫んだ。このニュースを聞いた人々は散り散りに走り去った。その際に、主に、略奪したものを持っている人々が軍隊によって逮捕された。騒乱の初日に、約190人が逮捕され、翌日に逮捕されたのは約110人であった。5月4日月曜日に、連隊長、士官、警察署長の指揮の下で、群衆が駆逐された後、逮捕された人々は、体罰刑を受けた。はじめ彼らをリストに記載していたが、後でそれを止め、性別や年齢に関係なく片っ端から罰していった。50回から300回の鞭が加えられた。噂のとおり、罰せられていたのは主に略奪した物を持っていた人々であった。体罰刑を加えられた人々は、嘲笑と侮蔑を浴びせられ、どんな言い訳も通じなかった。目撃者の一人はこの時の様子を次のように語った。体罰の場所から離れた所に、農婦が、乳飲み子をかかえて立っていた。彼女は、通りの人々に向かって叫び、泣いていた。通りがかりの人がなぜ泣いているか尋ねると、逮捕者の中に自分の夫がいるとのことだった。夫は病弱で、ムチ打たれたら死んでしまう、と言った。ちょうどその時、刑を受けた人々が出てきた。婦人はその中に自分の夫がいることに気づいた。夫が彼女のもとに駆け寄ると、彼女は大声をあげて、気を失った。ゴルボフ大佐が、体罰刑を行った様子は、たしかに満足させるものであるとまでは言えない。しかし、彼がいかに善意を持って実行したかにつ

いては、多くの証言がある。ベンジェルスキー連隊の陸軍中尉ミハイロフスキーがオルロフスキー氏の同席のもとで私に個人的に語ったところによると、彼は通りで、外套に身を包み、傘をもった身なりの立派な25才くらいの婦人を逮捕した。兵舎に連れていき、25回の鞭打ちを行った。私は、秘密裏に調査したが、努力の甲斐もなく、今に至るまでこの婦人が誰であったのか不明である。鞭打ちの刑にあった人の中に、自分の財産を守るために逮捕されたユダヤ人が30人ほどいた。次のような話が人々の間で語られている。居酒屋店主の一人が自分の全商品を荷造りして、5月3日日曜の夜に店にそれを取りにやってきた。どこかに隠すためである。その時、パトロール兵が店の中にいた彼を見つけ、逮捕し、他の逮捕者が収容されている場所に連行した。月曜日に彼の店は群衆によって破壊され、彼本人は鞭打ち刑を受けた。警察署長と2人の巡査を代表とする地元の警察は、狼狽していた。警察署長はすべての権力を大佐である指揮官に明け渡してしまっていた。指揮官は、正しい者と犯人の区別なく、自分の思うがまま、逮捕・釈放・処罰を行っていた。一般に言われているように、彼は、キエフから派遣された際に与えられた命令「この地区に平和を取り戻すためなら、思いつくまま何でもせよ」に従ったのだ。彼はこの言葉によって、彼のすべての行動を正当化した。予審判事ルイジョフは、「騒乱発生時に、自分はある理由で大佐の近くを婦人たちと共に歩いていた」と言った。「大佐は、私に次のように言った。『お役人様。そこを歩かないでください。私には[あなたを]鞭打ちにする権限があるのですよ』と。」翌日火曜日に、県知事閣下が来られ、その日、ゴルボフ大佐は、さらに40人を鞭打ち刑に処した。多くの者は、略奪の現場で、暴徒たちの間に何らかの目印があることに気づいた。それは、上に帽子がかかっている杖とか、赤い帯が掛けられた杖であった。また、鐘や口笛を聞いた者もいた。群衆は誰かに指揮されているようであった。特に群衆の間に目立ったのは、イヴァノフ兄弟（グリゴリーとアモス）という名の町人であった。彼らはスイソイエンカ家である。スイソイエンカ家は、スメラ村の農民に影響力があり、ジャボチン村に自分の土地を持っている。この

イヴァノフ兄弟は、連隊長の目の前で、次のように叫びながら、暴徒のところに駆け寄った。「兄弟たち！ユダヤ人がロシア人とその子どもたちを殺しているぞ」と。群衆はこの叫びに大きく反応し、さらに大きな怒りを燃やした。イヴァノフ兄弟は、未だに逮捕されていない。警察が彼らを捜査していないためだ。騒乱においても一人目立つ人物に、アレクサンドル・イヴァノフ・セルゲエフがいる。彼は、ボプリンスカヤ駅の電報担当者で、貴族であり、同じく群衆を指揮していた。彼については、何人かの士官や巡査が名を挙げている。ある巡査は、次のように述べた。「私が群衆に近づくと、セルゲエフが馬の手綱を取って『何だ。おまわり。お前も、ユダヤ人の味方か』と言った。」セルゲエフは逮捕され、警察に拘留されている。予審判事スパロは、ズヴェニゴロツキーの町人ニコライ・アレイニクの名前を挙げている。彼は、騒乱が始まる前に、通りを走りながらこう叫んだ。「兄弟たち。ロシア人が殴られているぞ」と。さらに、このアレイニクは、逮捕され、大佐のところに引き立てられた際に、下級警官の前で、大佐の悪口を言い、大佐を殺してやる、と言った。この件について、警察署長は調書を取った。アレイニクは逮捕拘留されている。予審判事ルイジョフは、同じく群衆を指揮した人物として、町人アレクサンドル・チェルカッスキーの名を挙げているが、チェルカッスキーは今のところまだ探し出されていない。町人チェルカス・ヴァシリー・ダヴィドフ・ブラトフ（彼はタタール人である）は、日曜日夕方7時に、群衆と一緒に、ユダヤ人ハスケリ・カリンスキーの家に盗みに入った罪により摘発された。この際、彼は、ユダヤ人女性クライナ・カリンスカヤの頭を板で殴った。この傷により、彼女は死亡した。ソフィア病院の医師ベルンシュテインの果たした役割について報告しないわけにはいかない。彼は、中年の男性で、大家族を支えるキリスト教に改宗したユダヤ人であり、スタニスラフの十字架を首に掛け、胸には赤い十字架をぶらさげ、腕には赤い十字架の腕章をして、群衆の間をゆっくりと行き来していた。多くのユダヤ人は、彼は教唆者であると言っている。しかし、これは正しくはないだろう。ある負傷したユダヤ人が病院において、「もしベルンシュテイン

がいなければ、私は恐らく殺されていただろう」と述べた。ベルンシュテインが守って、懇願してくれたおかげで、ようやく彼は死を免れたのだ。このベルンシュテインは、大佐の前で、多くのキリスト教徒だけではなく、ユダヤ人をも体罰から守ったのである。とにかく、ユダヤ人社会は、彼に対して怒りを燃やし、彼こそ主要な教唆者であると言っている。ボブリンスカヤ駅の職員モナステイルスキー某の名を挙げる人々もいる。彼は、騒乱の際にユダヤ人を殺害した。当初、モナステイルスキーは逮捕され、オルロフスキー氏によって取り調べを受けたが、モナステイルスキーを告発するに値する情報はまったく得られなかった。モナステイルスキーが逮捕されるきっかけとなる報告を提出した連隊長は、正式な文書において、モナステイルスキーをいかなる罪でも起訴しないと声明した。その中で、彼は、自分が彼を逮捕したのは、オストログラツキー憲兵隊長の命令によったと述べたが、当の憲兵隊長は、モナステイルスキーを逮捕したのは、連隊長の声明によってであったとする電報を送ってきたのである。この結果、モナステイルスキーは釈放された。ユダヤ人たちは、彼が殺人者であると頑強に主張している。グセフのロシア店の番頭ズャーチ・イヴァノヴィフ（スイソエンコヴィフ）も群衆の中から出てきて、「ユダヤ人を叩き殺せ」と叫んだ。彼も指導者と見なされている。さらに、グセフの商店の屋根の上に彼の息子が立ち、軍隊の到着を監視していたという。軍隊を運ぶ列車が近づいて来ると、彼は「おい！軍隊が来たぞ」と叫んで屋根から降り、群衆は蜘蛛の子を散らすように散り散りになった。5月3日と4日の騒乱の際に、スメラにおいて、キリスト教徒2人が発砲によって死亡し、ユダヤ人4人が群衆の殴打によって死亡した。35人が重傷を負った。その中には、チェルカフスキーの地主シェイヴァフ・フィリシュテインがいた。彼は、額の骨を砕かれて病院で死亡した。死者の中には、イツコ・アヴルモフ・ファインシュテインがおり、5月4日月曜日に通りで遺体となって発見された。ブイチュコフの技師の報告によれば、月曜日の朝に、負傷したイツコ・アヴルモフ・ファインシュテインが寝ていたユダヤ人ペイシクの家で群衆が押し掛けて彼を殺したという。このファイン

シュテインについては、彼の遺体は袋詰めにして発見されたという噂が流れている。しかし、この噂は事実と確認されていない。騒乱の際に、ベンデルスキー連隊二等大尉スハンスキーがある労働者にハンマーで襲われ、スハンスキーは、自分を守るためにリボルバー銃で彼を撃った。この労働者は、フィンランド人エクレンドであり、リボルバー銃の弾により負傷したが命に別状はなく、入院中である。証言によれば、彼の体には殴られた跡があるという。エクレンドは、酔っぱらっていて、何をされたのか憶えていないと言っている。死亡者と負傷者のリストは別々に提出されている。破壊され略奪された家はいくつあるか、また、ユダヤ人がどれだけの損害を受けたかについては、現在まだ明らかになっていない。分かっているのは、被害を受けたのは大部分貧しい人々であり、商品や高価なものをあらかじめスメラから運び出していた金持ちの被害は少ない。貧しい人々は、数千人が着の身着のまま逃げ出した。スメラ村では、これらの飢えた哀れな人々を助けるための組織が作られた。ポプリンスキー伯爵は、一度に千ルーブルを寄付し、毎日百ルーブルを寄付し、被災者に食糧やパンを与え続けている。

5月3、4日、スメラ村での騒乱の発生と同時に、村の周辺のユダヤ人民家が襲撃され、略奪が行われた。それらは、コンスタンチノフカ、ブトゥカ、バラクレイ、スタロセリヤ、グレチュコフ、ヤプロノフカ、ベレズニヤキ、ザレフカ、プレスカチェフキ、ステパンキ、ドゥビエフカの各村である。これらの村における騒乱については、詳しい報告はまだ私のところに来ていない。その報告は、憲兵たちに任されており、私も自ら出向いて、調べる予定である。死亡事件が起こったのは、ベレズニヤキ村だけであり、群衆はユダヤ人一人を殺害した。他の村では、ユダヤ人の持ち物に対する略奪が行われた。これらの村における騒乱について詳しい報告は、個別に行い、スメラ村における騒乱について何らかの報告があれば、追ってご報告いたします。大尉ルドフによる署名。(Ll. d. 38-43)。

## 第 166 号

1881年5月3、4日にスメラ村において発生した騒乱の際の死亡者及び負傷者の一覧。

## 死亡者：

1. 無期限休暇中上等兵チホン・ヤコヴレフ・ヴァヴィロフ。銃弾を受け即死。
2. チェルカッスキー郡ベロゼリエ村の農民ミハイル・クチェレンコ。額に弾を受けて死亡。両者とも軍の発砲により死亡。
3. スメリャンスキーの地主ゼリマン・ポロンスキー。
4. ニツコ・アヴルモフ・ファインシュテイン。
5. ロトミストロフカの地主、メール・ヴォルコヴィッチ・メジボフスキー。
6. スメラ村地主クレイナ・カリンスカヤ。これら4人は群衆によって殺害された。

## 負傷者：

1. スメラ村地主：アヴルム・サボジュニク。
2. ゼリク・オストロフスキー。
3. ゲルシュコ・ジニコフスキー。
4. モシュコ・ポイシク。
5. 退役軍人イヴァン・ブラスラフスキー。
6. ウフィムスカヤ県の農民イヴァン・ボロジン。
7. スメリャンスキーの農民アンドレイ・ポコチレンコ。
8. クレメンチュク市の農民ヤコフ・イヴァンツォフ。
9. 退役軍人パヴェル・ジュレンコ（バラクレエフスキー工場勤務）。
10. ハツェク村農民デグリス・クラフチェンコ。
11. フィンランド人イヴァン・フェドロフ・エクレンド。
12. 農婦タチヤナ・ジニチェンコヴァ（発砲の際に足に銃弾を受ける。軽傷）。
13. スメラ村農民ミハイル・ブラヴェンコ（角砂糖工場勤務）。
14. オルロフスカヤ県ポドゼエフ村農民ハリトン・レヴィンツェフ（ホロドネンスカヤ大農場勤務）。
15. アンドレイ・マルコフ・ヘルソンスキー（12才の少年）。
16. スモ

レンスカヤ県パリツェフ村農民フォードル・ボルシェフ。17. トウリスカヤ県ミハイロフスカヤ村農民ヴァシーリー・ボロフツェフ（ボブリンスキー伯爵の厩舎で働く）。18. チェルカッスキー郡ゴロヴァチン村ダニロ・アントネンコ。19. スメラ村エフセイ・リャホフ。20. チェルカッスキー郡テルノフカ村ウマンスキー。21. スメリャンスキー地主：レイバ・バクリミルスキー。22. シュリム・ヤムポリスキー。23. フロイム・ケリニツキー。24. アブラム・バラノフスキー。25. ギツリヤ・ゴレヴィッチ。26. ドゥヴィド・イエルサリムスキー。27. ナフマン・プロツキー。28. ツイプラ・コガン。29. ゴルダ・タルタコフスカヤ。30. アヴラム・ツアジコフ。31. メール・クズネツォフ。32. ゲニヤ・クルプニク。33. エステル・タルタコフスカヤ。34. モルツコ・ブダ。35. チェルカッスキーの地主シェイバフ・フィリシュテイン（5月7日夜から8日の朝にかけて病院にて死亡）。大尉ルドフの署名。（L. d. 44）。

#### 第167号

キエフ県憲兵局長代理ルドフ大尉が局長に宛てた1881年5月14日付報告書第86号の写し。

第84号報告書に追加して、下記報告申し上げます。スメラ村における騒乱に関する噂が周辺にすばやく広がった。これに油を注いだのが、日曜日に近郊の村から農民たちが縁日にやってきたという事実だった。月曜日朝にはすでに、コンスタンチノフカ、プトキ、バラクレイ、マールイエ・スタロセリエ、マーラヤ・スメリャンカ、グレチュコフカ、ヤブロノフカ、ベレズニャキ、ザレフカ、プレスカチェフカ、ステパノフカ、ドゥビエフカ各村に地元の農民たちや裕福な農民たちすら集まり群を作り始め、スメラ村で行ったのと同じことをする必要があると話し始めた。これらの群衆は、普通、居酒屋に集まり、そこで騒乱が発生した。農民たちは当初ウオッカを買い求め、ほろ酔い加減になると、今度は力づくで取り始めた。ユダヤ人の店主は、彼ら

に、金を払わなければ酒は渡さないといい、口論になった。農民たちは、まず店を破壊し始め、村にあった他のユダヤ人の民家を襲った。上記の各村における騒乱の全体的な性格は以下のものである。ユダヤ人の持ち物に対する略奪と破壊及びユダヤ人への暴力が特に激しかったのは、ベレズニャキ村であった。ユダヤ人に対する略奪と暴力に、約50人の地元農民とすべての自作農が加わった。その中に、ベレズニャコフ・ピョートル・ポガニェツ補助警官がいた。すでに述べたように、ユダヤ人レイバ・ノリスキーの居酒屋で事件は起こった。彼の持ち物が徹底的に破壊され、最後の一滴に至るまで樽のウォッカが外に流された。最初の襲撃は、アブラム・ドロピートの24才になる息子によって行われた。退役軍人フョードル・クリクンが、通りを歩いていたユダヤ少年ノリスキーから、持ち物が入った包みを奪い取って、彼を川に投げ込んだ。少年は川から出てきたが、包みの中の持ち物は持ち去られていた。酔った群衆はユダヤ人の民家に殺到し、略奪を始めた。ユダヤ人家主エヴリンスキーの家を襲撃した群衆は、家の中の財産をすべて略奪し、納屋や庭、園において家主エヴリンスキー本人を明かりを手にして探し始めたが、身を隠して見付からなかったので、80才を越える老人であった彼の父親モルツカ・エヴリンスキーを捕らえて、我を忘れて襲いかかり、殴りつけ、ナイフをつきつけて金を要求し、頭に斧をふりかざして殺した。モルツカ・エヴリンスキーの死体には、いくつかの刺し傷があり、頭は斧で割られていた。取り調べにおいて、ベレズニャコフ村出身の10人が首謀者であると判明し、逮捕され、取り調べは、予審判事スパロに委ねられた。ベレズニャキにおいて、11軒のユダヤ人家屋が破壊された。バラクレイ村において、83人の群衆がベレズニャキにおいて行ったのと同じことを行った。つまり、15軒ほどのユダヤ人家屋を破壊した。ユダヤ人の婦人と子どもたちは、襲撃を避けて、バラクレイ砂糖工場に逃げ込み、工場長が彼らを保護した。ザレフカ村には、ユダヤ人の家屋は3軒しかなかったが、農民たちによって破壊された。ザレフカ村の補助警官マハル・フヴォイドィシュは、上司の命令があると言って実際に略奪に参加していた。ヤプロノフカ村にお

いて、ユダヤ人の居酒屋2軒が破壊され、ヤプロノフカ村の農民アンドレイ・ゼレンスキーが5月2日にもユダヤ人ゼイリク・ブラインスキーの家にやってきて、次のように書かれた紙切れを彼に見せたことが明らかになった。「キリスト教徒よ、目覚めよ。ユダヤ人の軛から解放され、彼らを追い出す時が来た。さもないと、おまえたちは彼らの奴隷だ。」ゼレンスキーは「これは、ヤプロノフスキー砂糖工場職員から受けた命令の一部だ」と述べた。書記アンドレイ・ボンダレフスキー(19才)は、「私はパスポートの提出のために、4月の終わりにスメル村の第1郷の警察署長事務局にいた。警察署書記ウセンコは私に『祖国の息子』の第91号を確かに見せたように思われる。そこに、上記の言葉が載っており、彼はそれを紙切れに書き写し、それを実際ゼレンスキーに手渡した。ゼレンスキーは、労働者たちに読んで聞かせた。彼らのうちの幾人かによると、ボンダレフスキーは、自分たちのいる前で、ゼレンスキーを説得し、労働者にたわごとを言わないように命じた、と言う」と述べている。他の村々では、ユダヤ人のすべての民家が破壊と略奪の被害に遭い、特別な事件は起こらなかった。ただユダヤ人に属するあらゆるものだけが盗難と破壊の対象となった。キリスト教徒は「これは上司の命令でさあ」と述べた。この略奪について取り調べが行われているのは、さしあたり、コンスタンチノフカ、ブトキ、スタロセリヤ、バラクレイ、グレチュコフカ各村であり、警察が調査にあたっている。それらの4分の1の村では、警察職員による5月8、9、10日の取り調べに際して、ベンデルスキー連隊の1個中隊と、連隊に所属する少将スリヴァが立ち会った。スリヴァ少将は、暴動に加わった農民の取り調べの現場において、鞭を使った刑罰を執行した。かくして、バラクレイ村において処罰されたのは60人、スタロセリヤ村では6人、コンスタンチノフカ村とブトキ村(コンスタンチノフカとブトキ、及び隣接した村々)では15人が処罰された。命令に従って、50回から200回の鞭打ち刑が執行された。見た所、農民たちは、このような裁判に満足しているように思われたが、ユダヤ人たちは、この刑罰では飽きたらなかった。つまらない日用品から高価な毛皮に至るまで何もかも

が破壊されたからだ。毛皮はずたずたに引き裂かれ、銀製や金製のものは略奪された。警察の調査によれば、グレチュコフカ村における騒乱の首謀者は7人であり、警察の看視下にある。現在、ユダヤ人は、幾人かの農民が地中に埋めて隠している自分たちの盗まれた品々を懸命に探している。隠し持っていたものが見付かった場合に、農民は鞭打ち刑に処せられるので、提出することを恐れており、毎夜、誰かが盗品を水の中に投げ捨てている。これは、村々だけではなく、スメラ村においても起こっている。数人のユダヤ人が、こっそりと盗品を二束三文で買い付けている。警察職員の数が少ないため、破壊され盗まれた品々の回収作業のための迅速な対策はまったく取られていない。ベンデルスキー連隊の司令官は、盗品回収について命令を発し、それをスメラ村において方々に掲示したが、有効な対策とはならなかったようだ。ゴルボフ大佐は、この公示において、「盗品を持っている者は逮捕され、軍事裁判に掛けられる」と布告しようとしたが、知事の反対により思いとどまった。スメラ村や周辺地域に住むユダヤ人はひどく打ちひしがれている。彼らは、スメラ村周辺の工場労働者たちによる第二の襲撃と略奪を絶えず恐れている。ユダヤ人の言葉によれば、彼らは脅威であり続けているという。さらに、スメラ村やベレズニャキ村において5月3、4日に被った物質的な損害や、傷害、殺害事件に対する法的な措置に対しても不満を抱いている。彼らは毎日私のところにやってきて、一体誰に嘆願したらよいか教えてくれと言っている。また、自分たちを新たな騒乱から守り、命を救ってくれとも述べている。彼らは、略奪者の非常に多くの者たちが、自由に歩き回り、体罰を逃れており、自分たちの前で、「俺たちは、こんなもの恐れていない」と言っているかのように振る舞っている、と言っている。5月3、4日の事件の際に、地元警察は、まったくユダヤ人を助けなかった。これは、数が少なかったためであり、また、ユダヤ人の言うように、特に警察署長がユダヤ人を守ることを願わず、きちんとした対応をしなかったためである。彼らは、事実として、エレメイ・バノフという酒類販売業者で農民でもある者が、説得によって5軒ほどのユダヤ人家屋とユダヤ人プリルツキーの店を

略奪から守ることに成功したと述べた。この事実に基づいて、彼らは「聖職者たちを呼び出し、説得を適切に行っていれば、また、最近のケースにおいて武器を使用できてさえいれば、略奪者の集団は、説得に応じただろうし、いわんや、軍隊がいれば事件を起こすことはなかったはずだ。5月4日の月曜日に、群衆が暴動を起こしているにもかかわらず、軍隊は、平然とした態度で臨み、略奪と暴動の鎮圧に積極的に関わることをまったくせず、地元警察署長は通りにおいて将校たちの横に座っていた」と主張している。また彼らは、「もし軍隊が商店を包囲していれば、群衆はそれに近づくことはできなかったはずだ。軍隊や地元警察が無関心な態度を示しているうちに、群衆は略奪の許可が下りたかのように見なした。略奪の被害額は現時点では計算することができないほど大きなものである。2500人ほどのユダヤ人が生活の手段を失い、着るものもなく放置され、スメラ委員会の援助金に頼って生活している。これらの哀れな人々の苦しみは筆舌に尽くし難く、委員会の支援金ではまったく足りず、なんらかの外からの緊急援助がない限り、これらの2500人のユダヤ人たちが餓死することが予想される。現在でも、委員会が提供しているのはパンだけである。略奪の被害を受けたユダヤ人はみな、調査委員会の到着を待っており、彼らの訴えを審議してもらうことを望んでいる。というのも、これまで警察に対して訴えても、満足のいく結果が得られなかったからである」と述べている。大尉ルドフの署名。(Ll. d. 46-52)。

## 第168号

キエフ県憲兵局長補佐ルドフ大尉による1881年5月15日付報告第88号の写し。局長へ。

昨日、スメラにいる私のもとに、チギリンスキー郡アレクサンドロフカ村のユダヤ人協会代表者であるユダヤ人ハイム・ラトゥイシュとモルツコ・トリャンスキーがやってきて、鉄道駅「フドゥクレエフカ」近くにあるアレ

クサンドロフスキー砂糖工場の副工場長で町人のフォシェンコがユダヤ人略奪・暴行の教唆者であると述べた。彼は少しも躊躇することなく「ユダヤ人を始末したら、今度は人民を抑圧する地主だ」と語ったという。また、彼らは「フドゥクレエフカ」駅の電報担当官であるシュクリャレンコが「ユダヤ人と地主を皆殺しにする時がやってきた」という噂を広めた、とも述べた。シュクリャレンコについては、ユダヤ人たちはすでに、チギリンスキー郡第2郷の警察署長に訴え出ており、警察署長は、シュクリャレンコによって広まった噂について調査を取っていた。上記の結果、代表者の言葉に従えば、アレクサンドロフカユダヤ人協会は最高の警戒状態にある。彼らは、アレクサンドロフカ砂糖工場において、ユダヤ人殺害と略奪の計画が立てられていると断言した。この計画について彼らに内密に知らせたのは、工場事務局の補佐であるキリスト教徒バクランである。彼は、自分は貧しくて、地位を失いたくないので、名前を明かさないう求めた。大尉ルドフ署名。(L. d. 53)。

#### 第 196 号

キエフ県憲兵局長補佐ルドフ大尉による 1881 年 5 月 15 日付報告第 89 号の写し。局長へ。

命令書第 840 号に従い、文書にてご報告いたします。

1. アリスチド・ミハイロフ・ギエフスキー（ファストフスカヤ鉄道局書記。中年。教育があり、知識人社会においてきわめて高い評価を受けている）は、ユダヤ人モシュコ・ブロッキーから部屋を借りていた。5 月 3 日日曜日に、スメラ村において騒乱が発生すると、彼の部屋にあわてふためいた家主モシュコ・ブロッキーが駆け込んできて、自分をかくまってくれと言った。ギエフスキーは、最初、ブロッキーの部屋を明け渡すつもりはなかつ

た。群衆はキリスト教徒が住む家を破壊することはしなかったので、彼らに襲撃を思いとどまらせるために窓にイコンを掲げておくことすらした。しかし、しばらくすると、ギエフスキーはどういうわけか考えを変えて、モシュコ・ブロッキーの家に殺到した荒れ狂った群衆が自分の部屋を壊されることを非常に恐れ出した。ブロッキーは、高利貸であり、キリスト教徒から反感を買っていた人物であった。ギエフスキーは、2台の荷車を出し、自分の持ち物を運ぶための4人の荷役人をよこすようポプリンスカヤ駅に電報を打った。ブロッキーの家は、ヴラジミルスカヤ通りにあり、鉄道の踏切が近くにあった。そこに、送られてきた車両が近づいた。踏切のところに大群衆が集まり、連隊長と将校に率いられた軍隊がやってきた。彼らはみな巻きたばこを振る舞ったギエフスキーのもとに立ち寄った。ギエフスキー自身は自分の荷物をまとめ、荷役たちとスメラ村に住む分離派教徒ヴラス・アルセニエフがそれらを運び出していた。車両への積み込みには、群衆の何人かも手伝っていたという。部屋から荷物がすべて出され、ギエフスキーがそこから出て、蒸気機関車に乗り込み、軍隊が他の場所へ移動すると、群衆は待ってましたとばかりに、モシュコ・ブロッキーの家に殺到し、徹底的に破壊した。モシュコ・ブロッキーは、次のように述べている。5月3日の日曜日にギエフスキーのところへ駆け込み、保護を求めると、ギエフスキーは他の部屋に隠れ、窓から顔を出さないよう命じた。窓にイコンを掲げ、それを開け放ち、通りを見渡し始めた。群衆は幾度か家の回りを通り過ぎたが、スメラ村の有名人であるギエフスキーを見、また、窓にイコンがあるのを見て、家に触れようとはしなかった。群衆が側を通り過ぎるたびに、ギエフスキーはドア越しにブロッキーに向かって「必ずあなたの家を守るから」と約束した。それに対してブロッキーは、「このご恩は一生忘れません」と答えた。しばらくして、ギエフスキーの部屋に、モシュコ・ブロッキーの長年の宿敵であった分離派教徒ヴラス・アルセニエフがやってきて、ギエフスキーと何か話し合っていたようだった。ギエフスキーはブロッキーが隠れていた部屋のドアに近づき鍵を掛けた。ヴラス・アルセニエフがやってきたのは、偵察の

ためだとプロツキーは考えた。ギエフスキーがドアに鍵を掛けた時に、プロツキーの不安はますますつのり、ギエフスキーにドアを開けるように頼んだが、ギエフスキーは何か罵るだけで開けようとしなかった。プロツキーは鍵穴から、ギエフスキーの部屋で何が起きているかを見ようとした。ギエフスキーは大急ぎで自分の荷物をまとめ、ヴラス・アルセニエフはそれを助けているようだった。プロツキーはこれに驚き、部屋からの出口を探し始めた。裏口から庭へ駆け出た。結局、そこから知り合いのもとに逃げ込み、そこで夜を過ごした。彼は庭に長時間隠れている時に、ギエフスキーの下男アンドレイが群衆に向かって「若い衆！待ってくれ。俺たちの荷物はまだ運び出されてない。運び出したらすべてを見せるから」と叫んでいるのを見た。この下男は、ギエフスキーが出ていくと、プロツキーの家だけではなく、他のユダヤ人の家屋の破壊にも自ら加わり、逮捕され、連隊長の指示により、鞭打ち刑にあった。プロツキーの家の中のものはずべて破壊され、庭にあった蔵の中のシロップ入りの樽も壊され、酒蔵や冷凍蔵も破壊され、さらに、1800 ルーブルが入った鉄の金庫をもたたき壊された。プロツキーの番頭シュレマ・トポリスキーは、モシュコ・プロツキーと同じことを言ったが、そのほかに、ギエフスキーが家から出て、手を振りながら「ユダ公はいないぞ。みんな出て行ったから」と語った、と付け加えた。プロツキーの御者サヴェリー・コンドラチエフは、自分は庭にいて、中で何が起こっていたのか知らなかったの、何も知らない、と率直に語った。ギエフスキーの持ち物はすべて家からすべて出されて、彼自身が家から出て行ったことしか知らないと述べた。ギエフスキーが家を捨てて守ることを放棄したため、モシュコ・プロツキーは、家が壊されたのはギエフスキーのせいだと至る所において叫んでいる。ギエフスキーは長い間スメラ村に住んでいるので、破壊に加わった鉄道労働者たちは彼のことを知っている。それゆえ、群衆を説得して破壊活動を止めるようにできたはずだ。しかし、ギエフスキーは、モシュコ・プロツキーが住民からかなり憎まれており、持ち物をプロツキーの家に残しておくことによって被害を負いたくないと思ったのだ。ユダヤ人は全員、ギエ

フスキーがモシュコ・プロツキーを助けず、彼の持ち物を破壊から救わなかったことを責めている。私がスメラ村に着くとすぐに、「ギエフスキーのもとに群衆の一部がやってきて部屋から出ていくように、さもないと、おまえの持ち物もプロツキーのそれと同じ運命にあうぞ、と彼に脅したため、彼はプロツキーの家にある自分の住居を捨てた」という噂が聞こえてきた。この状況に関心を持った私は、彼を取り調べ、ギエフスキー本人に聞いた。彼は、自分がプロツキーの家から出たのは、軍隊が群衆を押さえ込むことができないように思われたからであり、酔った暴徒たちに持ち物を壊されたくなかったからだとして述べ、この噂を否定した。ギエフスキーに対してユダヤ人は憎しみを抱いていたが、誰も彼を教唆者と断定することはできなかった。彼を教唆者として非難していたのは、モシュコ・プロツキーただ一人だった。

2. 高齢で、スメラ村に長いこと暮らしていた医師アドルフ・レオンチエヴィッチ・ベルンシュテインは、ポプリンスキー伯爵のソフィエフスカヤ病院を経営している。彼は、怒りっぽく、粗野で、ユダヤ教からキリスト教への改宗者として、ユダヤ人に対してあからさまな不満と苛立ちの表情を示し、凶々しい態度で接していた。そのため、彼にはユダヤ人の患者が全くいなかった。また、このことがますます彼の苛立ちをつのらせていた。彼の家族は子沢山だったからだ。時と場所を選ばず、ベルンシュテインは、無遠慮にユダヤ人を面罵した。ベルンシュテインのことをよく知っている人なら、自分の仕事やもうけ仕事において彼は他のユダヤ人と何ら変わるところがないとわかるとは言われているが、彼はユダヤ人に非常に嫌われていた。スメラ村のユダヤ人住民とベルンシュテインとの間にある敵意は、現在まで解決されることなく続いている。ベルンシュテインは、何かにつけてユダヤ人を罵倒し、彼らにあらゆる不幸が襲うことを予言している。それに対して、ユダヤ人は彼の医師としての、また、人間としての信用を失墜させることによって対抗している。5月3日の日曜日の騒乱の際に、ベルンシュテインは、

知識階級の人々に混じって広場に立って見ていた。彼は、ユダヤ人を解散させ群がることのないように説得するために連隊長によって呼ばれた官給ラビであるブロンシュテインが危うく群衆によって暴行を受けそうになっているのを目撃した。ベルンシュテインは、ラビを家まで送るために自分の馬を提供した。ベルンシュテインは、完全にユダヤ人の性格をも持っている。彼は、群衆が自分をユダヤ人と見なすことを恐れ、そのため、家に帰って、首にスタニスラフ勲章を付け、腕には赤十字の腕章をはめ、「赤十字」のバッジを胸に付け、群衆の中をしきりに歩き回っていた。予備審査官スパロの要請に従って、彼は、現場において軽傷者に対して医療援助を行い、重傷者を自分の馬に乗せて病院まで送っていた。私がスメラ村に到着するやいなや、ユダヤ人は、ベルンシュテインを教唆者として訴えたが、誰一人そのことを証明するような事実を提示できなかった。彼らは、退役軍人ドゥヴィド・ウマンスキーとアレクサンドル・ブロッキーの番頭イヴァン・ポルタフチェンコを主要な証言者として挙げた。彼らは、ベルンシュテインがユダヤ人襲撃を煽動したことを証言してくれるだろうと述べた。しかし、ドゥヴィド・ウマンスキーは、5月3日日曜日にベルンシュテインがモシユコ・ブロッキーの家の前で群衆の間を行き来するのを見たが、彼が群衆に向かって何かを語ったのは知らない、ただ彼が頭をゆらしたのを見ただけだ、と言った。番頭イヴァン・ポルタフチェンコは、5月3日日曜日昼食後、アレクサンドル・ブロッキーの家の門のところ立っていると、自分のもとにベルンシュテイン医師が近づいてきて、こう尋ねた、と証言した。「イヴァン、君の十字架はどこにある。どうしてここに立っているんだ。なぜ遊びに行かないのだ。」それに対して彼は次のように答えた。「私はここで働いているのでさあ。いい給料をもらっているのですね。それでここに立っているわけです。」そして胸の十字架を彼に示した。ベルンシュテインはこう言った。「同じ給料を出すから僕のところに来たらどうだね。」番頭は答えて言った。「慎んで感謝申し上げますが、私はあなたのもとでお仕えたことがあり、あなたのことを存じ上げておりますのでね。」さらにユダヤ人ルヴィム・ボルチャン

スキーがベルンシュテインについてこう述べた。「わたしは、モシュコ・プロツキーの家の近くにある自宅の屋根に登って、ベルンシュテインが群衆に近づいて『兄弟たち。行動に移す時が来た』と語るのを聞いた。わたしは、モシュコ・プロツキーの家の襲撃の一部始終を目撃した」と。ユダヤ人モシュコ・ペイシクは「ベルンシュテインは負傷した私を治療してくれた。自分の馬を用意して私を病院まで運んでくれた。私の妻も彼に助けられた」と語った。アルテル・ドゥピンスキーは、ベルンシュテインを略奪者として訴えた。ベルンシュテインが群衆を煽動してユダヤ人襲撃と略奪に駆り立てた張本人であることを示す証拠はこれ以上挙がることはなかった。

3. イリヤ・イヴァノヴィッチ・モナスティルスキーは、ファストフスカヤ鉄道に勤務する28才の知恵遅れだが、不道德な人物である。ユダヤ人は彼のことをユダヤ人シェイヴァフ・フィリシュテインの殴打に参加した一人であると考えている。フィリシュテインは、この怪我により死亡した。フィリシュテインの知人であるヨス・ヴァルシャフチクは、5月3日日曜日の夜に、彼の家に、食肉製造業者で資産家のシェイヴァフ・フィリシュテインがやってきた。彼らは、その日起こった家の略奪と破壊について会話を始めた。シェイヴァフは、次のように語りはじめた。略奪者の中にモナスティルスキーもいた。その後、自分はモナスティルスキーの父親と会って、彼に「恥ずかしくないんですか。あなたの息子は非常に下劣なことに加わっているんですよ」と述べた。モナスティルスキー老人は「デタラメを言うな。息子はそこにはいなかった。こんなことを言って、あんたはひどいめにあうぞ。」朝方フィリシュテインは帰宅し、ヴァルシャフチクが彼を見ることはもはやなかった。ヴァルシャフチクは、モナスティルスキーが日曜日のユダヤ人民家襲撃に実際に参加したのを見たとき、自分自身語っている。イデル・ヴィシュニャツキーは、月曜日にユダヤ人シナゴグの二階の窓から、フィリシュテインの家に群衆が侵入して、3人がフィリシュテインを納屋から引きずり出して殴り始めたのを見た。しかし、これら3人が誰であるかは遠く

からなので判別できず、ただ身なりがよかったことだけは憶えている。ヴィシュニャツキーも、日曜日に暴徒の中にモナステイルスキーがいるのを見たと言っている。リヴェン・スロヴツキーと、シュレマ・ヤムポリスキーは、日曜日、ユダヤ人の家を破壊する群衆の中にモナステイルスキーがいたと言っている。スロヴツキーは、群衆が自分の家に近づいた時に、モナステイルスキーが前に進み出て、最初に家の窓に石を投げたのを見、その後、群衆は家に殺到して破壊したと言った。ヤムポリスキーは、月曜日の朝、モナステイルスキーが加わった群衆がシェイヴァフ・フィリシュテインの家に殺到し、納屋に身をひそめていたフィリシュテインを中庭に引きずり出して殴り始めたのを見た、と言った。シュレマ・ガノコリスキーは、モナステイルスキーがシェイヴァフ・フィリシュテインの頭を棍棒で殴り、彼がその場で倒れるのを見た、と言った。モナステイルスキーの父親は、ボプリンスキー伯爵のもとで長く働いている。若いモナステイルスキーについては、町の住民なら誰でも知っており、ほとんどのユダヤ人は彼と面識がある。上述の人々の証言だけではなく、他のユダヤ人も、彼について同じ証言をしている。モナステイルスキーは逮捕されたが、総督閣下の事務官オルロフスキー氏による取り調べの際に、連隊長・彼のメモによってモナステイルスキーは収監されたが、モナステイルスキーにいかなる騒乱の責任も負わせることを徹底拒否し、モナステイルスキーが自分の命令によって逮捕されたことすらきっぱりと否定した。上記のほかに、以下追加報告いたします。現在、極めて馬鹿げた噂がユダヤ人の間に広まっており、お気づきのように、多くのユダヤ人が、自分たちが嫌っている人々を中傷するために現在の機会を利用している。ルドフ大尉による署名。(Ll. d. 54-59)

#### 第 169 号

キエフ県憲兵局長補佐ルドフ大尉による、1881年5月15日付報告書の写し。  
第 90 号。

第82号の補足として、閣下に以下報告いたします。極秘の経路によって私が集めた情報によれば、スメラ村における5月3～4日の騒乱の中で特筆すべき人物は下記のとおり。グリゴリー及びアモス・イヴァノフ兄弟、巷の噂によりスイセンコフ一家及びその親族であるヴァシーリー・アンドリヤノフとオシプ・プカノフ。エフィム、グセフ（スメラ村の裕福な商人の息子）。若者ニキータ・ベレンソク（角砂糖工場の労働者）、パーヴェル・ピストル（居酒屋店主）、コルネイ・サポジュニク及びイヴァン・リャピナ（スメラ村の農民、前郷長の息子）。これらの人々は、指導者、煽動者であると考えられている。彼らは、騒乱の際に、様々な場所に現れて、大声をあげて群衆を煽動した。さらに、彼らは群衆の先頭に立ち、彼らの指示に従って商店や家が壊された、彼らの多くはホイッスルや小鐘を持ち、群衆はそれを合図とみなしていた、とユダヤ人の多くが、述べた。居酒屋店主パーヴェル・ピストルについては、彼の家で会合が行われ、上記の人々だけではなく、他にも工場の職人や労働者たちが集まり、パーヴェル・ピストル自身も、自分の命命に従う仲間を持っていた、と言われる。商人グセフの息子エフィムについては、彼も仲間の指導者であり、5月3日頃に、自分の回りにキリスト教徒の集団を集め、彼らに新聞のようなものを読んで聞かせたという。彼は、大胆に、「ユダ公どもを殴り、切り裂くことが許される時が来るだろう」と語った。しかし、特に、グリゴリー及びアモス・イヴァノフ（スイソエンコ）については、群衆の中で目立っていたと一般に言われている。このイヴァノフ兄弟は、警察署長や連隊長によって、群衆に大きな影響力を持ち、群衆を煽動した人物としてマークされていた。これについては私の第84号の報告において述べてある。このほかに、月曜の朝に、マラホフスキーの煙草工場のユダヤ人監督官の住居に、群衆が押し入り、持ち物を持ち去ろうとした。マラホフスキーは、群衆に向かって自分もキリスト教徒だから許してほしいと希ったが、群衆は無視した。この時、2人の身なりの素晴らしい人々が現れた。彼らは群衆を押し止め、マラホフスキーに向かってすぐに住居の中から物質を出すように命じた。これらの2人は、煙草店を破壊から守った。こ

の店には、まだ間接税が払われておらず、国のスタンプによって差し押さえられた煙草があるためである。巡回監督官オリシャンスキーは、群衆に対して、この工場に触れると罰を受けるから触れてはならないと長い時間をかけて説得した。群衆は言うことを聞かなかったが、またもやこれらの2人が現れて、近づきスタンプを調べ、それらが国が発行したそれであることを認め、工場に触れないように命令し、オリシャンスキーと何度も口づけを交わした。5月4日月曜日にマラホフスキーは、オリシャンスキーと一緒にツイストリの居酒屋に偶然立ち寄り、テーブルについてコニャックを飲んでいた何人かの人々を見つけた。彼らの中に、彼らの知人が2人おり、彼らにコニャックを勧めた。秘密の調査によれば、これらの2人の不明の人物は、ヤコヴ・スタリノイとサニコ・ザマラリエンコ（彼はボンヴァルである）であった。

大尉ルドフ署名す。(Ll. d. 60-61)。

## The Analysis of the Materials on 1881 Pogrom (2)

Tomobumi KUROKAWA

### ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze the historical materials, Материалы для истории антиеврейских погромов в России (Materials for Anti-Jewish Pogroms in Russia), and to describe the pogroms in Ukraine in 1881. The materials were published by the Russian government in Petrograd in 1919 and 1923, covering the pogroms between April and September in 1881. The materials are consisted of the two parts; the first part is of the official reports on the pogroms by the provincial governments to the central government, the second part is of the reports by count P.I.Kutaisof, sent by the central government to examine the pogroms in Ukraine. He describes the pogroms almost chronologically not only from governmental view point but also from the general public view point.